

今日の箇所における登場人物は「ユダヤ人」（41節以下参照）ではなく、「弟子たち」であるが、彼らもまたユダヤ人と同じ反応を示している。ここに出てくる「弟子たち」、彼らも民族的にはアブラハムの子孫であるユダヤ人であるが、ヨハネ福音書に出てくる「ユダヤ人」は多くの場合、主イエスの活動を警戒した当時のユダヤ教の当局者であると同時に、紀元1世紀末頃のユダヤ教徒を意味し、同時に、勢力を拡大し始めたキリスト教会を敵視する人々を意味している。民族としてのユダヤ人ではない。

だから、ここに出てくる「弟子たち」も、ガリラヤ地方を伝道している主イエスに従っていた人々であると同時に、主イエスが十字架にかかって死に復活した後、天に上げられて以降に主イエスを信じたキリスト教徒であり、キリスト教会のことである。つまり、聖霊の導きの中で主イエスへの信仰を告白し、洗礼を受けた人々のことである。

60節. 「ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。』」

ユダヤ人たちが「つぶやいた」のと同じように(41節)、弟子たちが「つぶやいて」いる。この時の弟子たちのことを今の私たちに置き換えてみるとどうなるか。私たちはあからさまには「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」とは言わないであろう。しかし、実際には何も聞いていなかったり、聞いても少しも理解していなかったり、理解するからこそ心ひそかに拒絶していたりする場合も多いのではないだろうか。そうであれば、それは「聞いていられようか」ということである。因みに、「聞く」というのは、ただ音波が耳に入って来るので聞いている、というのと違って、更に賛成し受け入れるという意味で聞く、という意味もある。

「ひどい」と訳されている言葉 (σκληρός、スクレーロス) は、「厳しい、厳格な、堅い」という意味の言葉である。つまり、話の内容が自分の知的能力には無理だ、理解しにくい、ということを表しているのではなくて、むしろ心に受け入れ難いという意味である。【TEV】 "This teaching is too hard. Who can listen to it?"

61節. 「イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。『あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。』」

説き明かされた神の御言葉が、たとえ理解できても受け入れたくないという場合に、それは「つぶやき」ではなくて「つまずき」である、と主イエスは言われる。

「つぶやき」、それはユダヤ人たちの専売特許ではないし、未信者の専売特許でもない。すべての人間が、なんの区別もなく、陥る現象である。

「つまずき」 (σκανδαλίζω、スカンダリゾー)、この言葉はマタイやマルコ福音書ではしばしば使われているが、ヨハネ福音書では2箇所だけ（ここと16章1節）にしか

出てこない言葉で、弟子たちに限定されている言葉である。「**つまずき**」という訳語は、少し問題がある。この日本語では、倒れるが、また起きることができる、という印象を与えるからである。ここで意味されているのは、鳥や獣を捕らえる「わな」のことであって、これは、一度かかったら逃れることができない、すなわち滅びである。私たちが御言葉を聴いて、理解できないは人によって違うけれども、しかし受け入れたくないという場合、それは単なる「**つぶやき**」などではなくて、その人の「滅び」である。

【TEV】 "Does this make you want to give up?"

「**弟子たち**」はユダヤ人とは違って「**わたしは天から降って来たパンである**」という主イエスを一旦は信じた人々、主イエスこそ命のパンであると信じた人々であり、さらには52節以下にある主イエスの言葉、「**はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる**」という言葉信じ、聖餐の食卓に与かっていた人々のことである。しかし、その彼らの中に、「**信じない者たちもいる**」。そして、その中にさらに「**裏切る者**」もいることを主イエスご存知であり、そのことを指摘される(64節)。

ヨハネによる福音書が書かれた時代、それはキリスト教がユダヤ教から完全に異端宣言をされた時代だと言われている。1世紀末の時代は、ユダヤ教はローマ帝国によるエルサレム神殿破壊をもたらしたメシア宗教的要素を切り落としていく時代でもある。メシア待望は民族意識を高め、異民族支配に対して激しく抵抗する運動を生み出し、結果、滅亡への道を走る以外にないからである。そして、その流れの中でメシア宗教(キリスト教)そのものであるキリスト教を異端として完全に排除する。それはキリスト(メシア)信仰を持っている者はユダヤ人の会堂から追放する、ユダヤ社会から追放する(9:22)ということである。つまり、イエスこそ待ち望まれていた救い主、人の子であると信じ、その信仰を公に言い表す者はユダヤ人社会の中では生きていけない。法的保護の対象から外されていた。

そういう時代の中で、この福音書は、主イエスの言葉として、「**わたしは天から降って来たパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。信じる者は永遠の命を得ている。わたしが与えるパンとは、世を生きかすためのわたしの肉のことである**」と告げる。それは、迫害の中で殺されても生きる命があるという宣言である。そして、教会の中にも「**信じない者たちもいる**」と告げる。

実際、それまでユダヤ教の一派の創始者のような形で主イエスを信じていた人々は、主イエスが誰であるかが次第に明らかになるにつれて「**つまずいて**」行き、「**弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった**」のである(66節)。これは肉において生きておられた主イエスが活動していた時の現実でありつつ、同時に、主イエスが霊において生きておられることを信じることで生きている1世紀末のキリスト教会の現実である。

る。そして、それは今の教会の現実でもある。日本のクリスチャンの平均寿命は2・7年だという統計があるそうだから。洗礼を受けたクリスチャンが、様々な理由で3年もしない内に教会生活をやめてしまう。世の中に帰ってしまう。そういう現実が確かにある。

そういう現実の中で、主イエスは「**人の子がもといいた所に上るのを見るならば・・・**」と意味深な発言をしておられる。実際に、この文章は途中で終わっていて、「見るならば」「なおさら躡くだろう」と続くのか、「そこで初めて信じる事が出来るだろう」と続くのか解釈が分かれる。「**もといいた所に上る**」という現実が何を意味するのかということと、「**見る**」とは何を意味するのかによって、色々な解釈が出てくる素地がある。

「**人の子がもといいた所**」とは、言うまでもなく「**天**」であるけれど、そこに「**上る**」という言葉は3章12節から15節に出てくる。その個所で明らかに告げられていることは、主イエスは天から降ってきて天に上げられるお方であるということ。しかし、その天に上げられる道は十字架の道である。モーセによって荒れ野で上げられた蛇とは、人々の罪の償いの象徴だから。主イエスは、すべての人間の罪を償うために十字架に上げられ、そして、復活をして天に上げられたのである。そのことによって、主イエスを神の独り子と信じる者が皆、永遠の命を得ることが出来る道を開いてくださったのである。

「**見る**」という言葉に関しては、6章の36節37節と40節を参照したい。ここでの「**子を見て信じる**」ということは、二重の意味で難しいし、ある意味、人間には不可能なことだと思われる。主イエスが肉体をもって生きていた時、その主イエスを見て、この方こそ世の罪を取り除く神の小羊と信じる、あるいは荒れ野でモーセが上げた蛇が象徴している存在であると信じるということは不可能なことだったと思う。当時のユダヤ人たちが、「**これはヨセフの息子ではないか**」と言ったように、偉大な人間、凡人とは違う人間ということは分かったとしても、神と等しいお方であると分かる、信じる、ということは不可能なことだと思う。肉体を見ているのだから。

しかし、今度は逆に、主イエスが十字架に上げられ、さらに復活して天に上げられて以後、「**子を見て信じる**」とか「**人の子がもといいた所に上るのを見る**」とかいうことは、如何にして可能なのか？肉体として主イエスが見える時に主イエスを神と等しい独り子であると信じる事が不可能だったのに対して、今度は見えないのだから「**見る**」ということ自体が不可能である。私たちは誰も、当時のユダヤ人が見たように主イエスを見ることは出来ない。しかし、この福音書はその現実を知りながら、「**見る**」ということを書いているのだし、その最後には主イエスの言葉として「**わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである**」という言葉を書くのである(20:29)。

つまり、「**見る**」ことと「**信じる**」こととの関係は単純なものではないし、「**見る**」ということの意味内容もそんなに単純にして浅薄なものではない。

「聖餐」のことを私たちキリスト者は「目に見える徴」「目に見える御言」としばしば呼ぶ。それは聖餐式で配られるパンの中に、私たちの罪の贖いのために十字架につけられたイエス・キリストの体を見るから。また、十字架の死から甦らされた復活のキリストの体を見る。肉体で生きている主イエスを見ることは、今の私たちはないが、聖餐の食卓で配られるパンとぶどう酒を見ることによって、最後の晩餐の時の主イエス、十字架の主イエス、復活の主イエス、天上の主イエスを見る。そして、その主イエスが肉体の命ではない命、霊の命、永遠の命を与えてくださることを信じる信仰が強められる。

しかし、人が見れば、ただの一切れのパンと小さなカップに入ったぶどう汁の中に、今言ったような主イエスの様々な姿を見ることが出来る信仰とは、一体どのようにして与えられるのか。主イエスは、これまでも再三、「父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る（つまり、私を信じる）」とか「父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとへ来る」と言われてきた。そして、今日の箇所でも、そのことを繰り返して「『父からお許し（原語では「δίδωμι、ディドーミ、与える」と同じ）がなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ」（65節）と言われている。

宗教改革者のカルヴァンは、聖書に記されている言葉を信じる信仰を手にするために人間が出来ることは全くないと言った上で、こう言っている。「神はその聖霊によって、我々の中にこのような働きをなさるのである。」（『ジュネーヴ教会信仰問答』問三〇四）信仰は神様の賜物である。聖霊の賜物、恵みである。ここには神の自由な選びがある。私たちとしては、いつ何時働かれるのか分からない聖霊に対して心を高く上げて備える以外にはない。63節に「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」というあるように、「肉」つまり知性とか理性とか感性とかいう人間的な能力で理解することも出来ないし、まして信じることは出来ない。理解することも信じることも、聖霊による。